
泣いてもいいよ。

南川

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

泣いてもいいよ。

【Nコード】

N1848H

【作者名】

南川

【あらすじ】

泣かないで。それが、悲しみの涙なら。泣いてもいいよ。それが、喜びの涙なら。組織を倒してからのお話。新志（コ哀）になる予定
@ 新蘭ファンの方は、ご注意くださいm（＿）m

01・プロローグ（前書き）

新志（コ哀）になる予定です。

新蘭ファンの方はbackお願いします。

01. プロローグ

手術中のランプが赤く光る。

俺は壁にもたれ掛かり、髪をくしゃりと握り締めた。

助かってくれ…どうか、アイツを助けてくれ。

「つくそ——！」

俺は何やってんだ。情けねエ。

俺が油断さえしていなければ。アイツはこんなめに遭わなくて済んだかもしれないのに。

足に力を入れて、思いっきり床を踏みつける。

でも、どうしても、この悔しさや不安から逃れることが出来なくて…

頭が痛い。

ふと顔をあげると、ランプがきえた。

俺は拳を握り締め、立ち上がった。

01・プロローグ（後書き）

はじめまして！^{ミナミカワ}南川です。

初めての連載なので…ちゃんと完結させられるかどうか不安ですが

…（笑）

私なりにがんばってまいります！ので、温かい目で、見守ってて
やってくださいm（―）m

02・彼の涙（前書き）

哀ちゃん視点です

02・彼の涙

暗い廃墟。

その場所に二人の人影。

一人は長い、銀髪。

もう一人は…子供？

二人ともすぐく怖い顔してる。汗が頬をつたり、顎にたまって一滴ずつ落ちている。

『…——ジンっ』

『迂闊だったな。工藤新一。』

…銀髪の男が、少年に銃口を向ける。

『あの世で悔やむんだな。自分の愚かさを…!!』

『…——っ』

少年が自分の命を諦め、男が引き金を引いた時。私は飛び出していった。

『！……シェリー……』

『灰原!!』

——パシユッ

『…灰原!』

私は、銃弾を脇腹に受けた。
どうしようもない痛み、顔がゆがむ。

『…は、灰原?』

薄れゆく記憶の中で彼が私を呼ぶ。

何度も、何度も。

でも私は、返事をする事ができない。唇を、動かす事が出来ない。

私の頬に、生暖かい物が落ちる。

彼の…体温?

…違う。これは涙。ねえ、泣かないでよ。

あなたが泣いている所なんて、見たくないの。

あなたはいつもみたいに、自信たっぷりに笑っていて。

なにもかも見透かしたように。あの、いつもの笑顔で。

ねえ、お願い。

工藤君…

「……は、ら」

「は、……い、は……」

「灰原!!」

…工藤君？

ここは…

「灰原！気がついたか！よかった！」

「これ、新一！あまり騒ぐでない！」

薄っすらと目を開く。真っ白の景色。

ここは、病院？

「…よかった。」

目の前には、記憶の中で一番最後に見たひと。工藤君。

「オメー2日間眠りっぱなしだったんだぞ。」

ああ、やっと状況が把握できたわ。

私はジンに撃たれ、気を失い、病院に運び込まれたのね。

「私…」

「今はなにもしゃべんな。安静にしてろ。」

頭がスッキリしてきた。周りもよく見える。

工藤君、博士、吉田さん、円谷君、小嶋君…そして、蘭さん。

みんな心配そうな顔をしている。

「哀ちゃん!!」

…吉田さん。泣き腫らした目をしている。円谷君も、小嶋君も。

こんなに小さな子達に心配かけるなんて…バカね、私。

「哀くん…」

博士はめがねを取って目頭を押さえている。

こんなにも、私を心配してくれる温かい人たち。

私も涙が出そうだった。

「ボク、平次にーちゃんに知らせてくる!」

蘭さんにそう言って、工藤君は部屋を出た。

蘭さんも私の所によってきて、「よかった…」と呟いた。

あの、ひまわりのような笑顔で。

02・彼の涙（後書き）

一気に二話投稿！

っていつても、別に話はたいして進んでいないのですが…

03・心境の変化

——パタン

静かに病室のドアを閉める。

「服部。灰原が目エ覚ましたぞ。」

「お、さよか。」

白い壁に寄りかかって携帯の画面をみつめていた服部は、あまり興味なさに顔を上げた。

「…んだよ。顔あわせねえのか？」

「ああ…俺はあの姉ちゃんあんま好かんからな。」

…ま、別にいいけど。

「ところで…」

服部はそう言っで携帯の画面を閉じる。

遠山さんとメールでもしてたんだか…

「大丈夫なんか、組織あいじうの方は…」

「ああ…」

そう、俺たちは組織の本拠地を突き止め、ジンを追い詰めた。

油断した俺は、ジンに殺されそうになり、それを庇って灰原が怪我を負った…

灰原が気を失ったあと、FBIが突入してきて、ジンは自決…

組織は壊滅した。

幸い薬のデータも残っており、それを回収したが、灰原が意識を失っていたため、俺はまだこの体のまま…という理由^{ワケ}だ。

「で、毛利のねーちゃんには、なんも話してへんねやろ？」

「……ああ。」

蘭にはまだなにも話していない。

元の体に戻ったら、全てを話そうと思っている。

だから灰原の怪我のことは、博士と服部、FBIの人たち以外には「たまたま事件に巻き込まれた」という風に言っている。

「ま、よかったな。あの姉ちゃんが目覚まさんかったら、お前ちっさいままやからなあ。」

…確かにそうだけれど。

俺は、薬がどうとかって、あまり考えていなかったかもしれない。

……ただ、目を覚ましてほしかった。

俺の目の前でアイツは撃たれた。

驚いた。アイツが俺を庇って撃たれるなんて…。

夢にも思っていなかったから、つい、自分を見失って取り乱しちまった。

まあ、普通そうなんだろうケド。

足元に広がっていく血の海に、ただ、呆然と立ち尽くして。

突入してくるFBIの足音、叫び声も、どこか遠くに聞こえて。

『守ってくれるんでしょ？』

いつかのアイツの訴えが、脳裏によみがえり、何度もこだました。

ああ、俺は、コイツを……守ってやれなかった。

約束を、守ってやれなかったんだ、と。

信じたくない現実と、自分への嫌悪感に、息が苦しくなった。

（は、灰原…）

「工藤っ！！」

服部の大声で、我にかえる。

「…あ、わりイ。」

「なんやねん。何度呼ばせるんじゃ、バカタレ！ボーっとしてたで？お前。」

「や、ホント…わり。」

「……………」

服部が静かに俺を見ていたことに、

意識が朦朧としていた俺は、気づかなかった。

03・心境の変化（後書き）

こんにちは！南川です。

いやゝ、なかなか話まとまりません；

どうぞ、飽きずによんでやってください

04・温かい涙

あら、また眠っちゃったみたいね。

そこにあっただのは、真っ白な病室。誰もいない。みんな帰ってしまったのだろうか？

さっきまでいた、彼らの笑顔を思い出す。

胸の辺りが、暖かくなったような気がした。口元が緩む。

私は、重い体を起こす。

「……………たっ」

急に走った痛みに、思わず脇腹を押さえる。

その痛みで、すべての記憶が現実世界に引き戻される。

組織は、どうなったのだろうか？

自分が途中で意識を失ってから、何が起きたのだろうか。

彼も、私も、無事だった。

と言う事は、FBIの人たちが駆けつけてくれたのだろうか？組織は撲滅したのだろうか？

どちらともつかない。

生か死か。

私の中に無い記憶で、全てが決まる。

その結果が聞きたい。

工藤君と博士はどこへ行ったのだろうか。

——コンコン

「…はい」

思わず答えてしまったけれど、工藤君か博士だろう。

「よお！灰原！」

「…やっぱり。」

うつむきながら呟く。

なんだよ、入ってきちゃいけなかったのか？などと、彼はぼやく。

後ろに博士がいた。

「哀君、目が覚めたようじゃな。」

「ええ。」

博士は、これまでにないくらいほっとした顔で安心した様子だった。

「みんな、見舞いに来てくれたの、覚えてるか？」

「…ええ、まあ。」

彼もほっとした様子で、ベットの横の折りたたみイスに腰掛ける。

「…みんなには、お前が誘拐犯に発砲された、とだけ言っている。
口裏合わせといってくれ。」

「ええ。」

聞きたい事が…本題に、移せない。

彼はとても遠くを見るような目をしていたから。

全てを悟った目をしていたから。

「ねえ、工藤君。」

「あん？」

彼は、私の聞きたい事がわかったようだ。

嬉しいのか、悲しいのか、微妙な表情をしていたけど、微笑んでいるのがわかった。

「ぶっ潰した。なにかも。もう、終わったんだ。」

重いけれど、優しい口調で、彼は言った。

私は、泣きそうになった。いや、泣いていたかもしれない。

熱い物が喉からこみ上げてきて、目頭が熱くなった。

「灰原……」

彼は、優しく微笑んだ。さっきのとは違って、ハッキリと、嬉しそうな表情だった。

彼の横で博士が泣いている。もう、博士だったら、なんて言いながら三人で笑った。

目の端にたまった温かい物を、手の甲で拭う。

うつすらと、手の甲が濡れた。

ああ、こんな涙、出るんだ。

嬉しくて泣いた事なんかなかった。

ただ、いつも苦しくて、悲しくて、切なくて。

こんなに温かい思い、抱いた事なんか無かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1848h/>

泣いてもいいよ。

2011年1月12日03時18分発行